

令和4年度 奈良県コミュニティ・スクール連絡会〔県立学校〕 実施報告

- 《日 時》 令和4年8月30日(火) 13:30~16:00
《方 法》 県立教育研究所での参集、またはZoomを利用したオンラインで実施
《参 加》 県立学校の管理職、CS担当者 計 41名
《内 容》 13:30~13:40 開会
13:40~14:50 講演「学校運営協議会での熟議を通じた県立学校の特色づくり」
文部科学省CSマイスター 香山 真一 氏
15:00~15:50 情報交換(グループ協議)
「各学校におけるCS運営上の現状と課題」
15:50~16:00 閉会

◆ 講演概要

「学校運営協議会での熟議を通じた県立学校の特色づくり」と題して、高等学校や特別支援学校においてコミュニティ・スクールを推進していく上で大切にすべき視点について御示唆いただいた。

- ・日本の高校生は、自分の意思をしっかりと表明することが、諸外国と比較してできていない。個性を育てるという理想は、かなり遠いと思える。そのため、それを実現する方法として、コミュニティ・スクール(以下、「CS」という。)は、有効である。奈良県では全校に導入され、仕組みは整った。今後は、中身をどう充実していくのが、大きな課題である。
- ・CSは、どんな人をどう育てるのかへの一つの方途として有効である。国では、学習指導要領で、社会に開かれた教育課程の実現が大きな指針となっている。これを受けて、新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループから、スクール・ポリシーの策定等に当たり、公立高等学校においては、学校運営協議会において協議を行うことが重要であると示された。学校運営協議会で、保護者や地域住民等との目標や課題の共有とその達成や解決に向けた協議が重要であると示されており、保護者や地域住民等の「等」には、他に市町村の担当者や商工会・商工会議所などの様々な方が入っているが、この中に生徒も入れた方がよいと考えている。
- ・奈良県ではコーディネーターの配置がされていないようだが、学校から、学校と地域をつなぐ総合的な企画調整役を担う地域学校協働活動推進員等のコーディネーターを配置してほしいという声が上がっており、配置が進めば、より質的な向上が期待できると思う。単に熟議だけで終わるのであれば、コーディネーターは必要ないかもしれないが、学校とコミュニティで連携・協働した活動をするとなると、先生方の授業の空き時間に打合せを行うことは現実的ではないので、そこをコーディネーターに担っていただきたい。熟議に基づいた実践ができるようになる。
- ・スクール・ポリシーの策定に当たっては、学校内外をつなぐものとして、学校運営協議会との対話を想定している。生徒もスクール・ポリシーの策定のプロセスの中に入れることが望ましい。主権者として育てていく過程で、生徒が主役となり、スクール・ポリシーを作ったり、考えさせたりしたものが、学校運営協議会で採られ、場合によってはそれが反映されていくといった経験をさせることは、有意義ではないかと思う。また、スクール・ポリシーの再確認、見直しについて、生徒は3年間で入れ替わるが、決めたことが3年間変わらないこともある。毎年、生徒自身に今年のスクール・ポリシーを問いかけることによって、生徒を学校の主役にしていくことができるのではないかと感じている。
- ・学校運営協議会は、学校の特色化・魅力化を進めていく上で、学校外の知見をもった人、人脈をもった人に関わってもらい、地元の基礎自治体だけではなく、広域から様々な知見を集めたいといった時に、有効である。様々な知見をもった人が集まり、有意義な意見が出て、熟議が行われれば、有効な会議になる。
- ・岡山県内の特別支援学校、和気閑谷高校の事例や熊本県、山口県の事例を紹介いただいた後、主権者教育、インクルーシブ・ダイバーシティ・SDGs、キャリア教育、まちづくり、働き方改革といった5つの観点からCSの可能性について考察していただいた。



◆ 情報交換・説明

- ・参加者は4グループ、オンライン参加者は5グループに分かれて情報交換を行った。その後、話し合った内容を全体で共有した。
- ・香山CSマイスターから、委員選任の考え方、熟議の在り方、委員の当事者意識について、コーディネーターについて指導助言をいただいた。

《参加者の感想》

- ・学校運営協議会の可能性の大きさを感じた。学校運営協議会の持ち方を工夫していきたい。
- ・コーディネーターの設置と活用の仕方が運営協議会活性化のポイントになると考えた。
- ・学校と地域が一緒にやっというのが、今までの学校評議員会と違うことがよく分かった。
- ・生徒と地域への関わりについて、できることを、生徒のためになることを探していきたい。生徒をどんどん参加させていきたい。「OKからLet's」という動きを大切にしようと思った。

